

## 書 評

## 植田重雄著『守護聖者』

— 人になれなかった神々 —

中公新書 1047、1991年11月、205頁

青 山 玄

著者は本書の「あとがき」に、「わたしが長い間念願としてきたことは、人間が何に向かい、何に達すべきか、その帰るべき魂の故郷の問題でありまた宗教的情熱のエネルギーの湧き出る源と人間性の志向する最高最大のものは何か、ということであった」(204-205頁)と書いている。著者は、このような問題意識からこれまでに『聖母マリヤ』(岩波新書)、『ヨーロッパ歳時記』(岩波新書)、『宗教現象における人格性・非人格性の研究』(早稲田大学出版部)、『ヨーロッパの祭と伝承』(早稲田大学出版部)、『神秘の芸術 リーメンシュナイダーの世界』(新潮選書)などの著作を公刊しているが、本書は、これらの研究を基礎にし、主として中世ヨーロッパに形成され発展した守護聖者の民間伝承の一部を、気軽に読めるように整理して、読者に提示している。中世キリスト教の一つの基盤をなしていたこういう民間伝承については、我が国において従来ほとんど研究されて来なかったことを思うと、本書は我が国の宗教学や中世ヨーロッパ史の研究に資するところが少なくないであろう。

著者は、大学生時代に読んだロマン・ロランの大河小説『ジャン・クリストフ』の各巻の扉に、「いかなる日もクリストフの顔を眺めよ、その日汝は悪しき死を死せざるべし」という銘文が載っているのを見て、それがどういう意味なのか全く分からなかったという。しかしそれから15年後に、在外研究でヨーロッパに赴いたら、すべてが少しずつ氷解していったと書いている(1頁)。同様の経験をした人は、他にも大勢いるのではなからうか。違う文化圏に住む読者向けに書かれたものでない小説その他の著作は、

作者と同じ文化圏に住んでいる読者に自明な慣習や民間信仰などを一々解説しないからである。筆者も、学生時代に辞書を引きながら読んだカエサルの『ガリア戦記』に、juvenes（ラテン語の辞書では「青年達、若人達」と訳してあった）が一番強いとあるのをヘンに思い、腑に落ちないままにしてヨーロッパに留学したら、古代ローマ人は28歳から42歳まで位の、いわば壮年期の人たちをjuvenesと呼んでいたことを学び、急に視界が明るくなったような体験をしたことがあるが、宗教的な価値観や庶民の通念などについては、実際にその文化圏に住んで文化の底辺面に隠れているものをつかまなければ分からないものが多いであろう。その意味では、著者植田氏がヨーロッパ文化の底辺面に隠れている守護聖者信仰についてのこのような研究を公刊したことは、誠に喜ばしい。

旧約聖書によると、神の民はモーゼ、サムエル、エリアらの予言者を、神と民との間に立つ仲介者として特別に尊敬していたし、マカバイ記2の15章では、400年も前に死んだエレミヤ予言者がユダの夢に現れて一振り of 黄金の剣を手渡し、「神からの賜物であるこの聖なる剣を受け、これで敵を打ち破りなさい」と励ましている。聖徳高い信仰者ばかりでなく、天使も神の前で人々のために取り次ぐ者として登場しており、ダニエル書の8章と9章には天使カブリエルが、10章と12章には大天使長ミカエルが、またトビト記の多くの箇所には天使ラファエルが、それぞれ主の前に仕える天使でありながら、人間を導き教え守護する者として描かれている。

新約時代に入ってもこの思想はそのまま続き、例えば黙示録の4章5章7章などでは、神の小羊の血によって清められた無数の殉教者や聖者が、天使たちと共に神の前に立つ者、祈っている者として描かれている。2世紀の後半からは、156年頃に殉教したポリカルポス司教の任地スミルナの教会が他教会に宛てた報告書「ポリカルポス殉教録」をはじめとして、殉教者の墓や遺骸の前で神に取り次ぎを願うと良く聞き入れられるという記録や話が多くなり、3、4世紀には殉教者崇敬が非常に盛んになった。しかし4世紀頃からは、殉教者に限らず、聖母マリアやその他の殉教者でな

い聖者に取り次ぎを願っても良く聞き入れられるという信仰が広まり、聖母やその他の聖者に対する祈りも盛んになった。

キリスト教会内のこのような動向に、ギリシャ・ローマ文化圏の異教的守護神崇敬の祝日や行事、並びにゲルマン諸部族の間に強かった精霊信仰の行事などをキリスト教化し、キリスト教を土着化させようとする動向が合わさって5、6世紀頃から次々と生み出されたのが、著者が本書で扱っている守護聖者の伝承や崇敬行事と考えて良いであろう。著者は「中世キリスト教文化は聖者文化といってもよいほどに、聖者は人々の心の中に生き、多くの宗教運動を起し、伝説を生み、絵画、彫刻が造型された。聖霊を具体的に体現しているのが、この聖者たちである。キリスト教は一神教であるといわれ、これに対し仏教、ヒンドゥー教、神道などは多神教であると宗教学では規定しており、一般にそう考えられている。しかし、現実にはこのような規定を厳密に守っている宗教は存在しない」（はじめに、IV頁）と書いているが、実際中世ヨーロッパでは、個人としてだけではなく、各教会も、市町村も、特定の職業も、国家としても、それぞれ守護聖者を決めて、その保護と神の御前での取り次ぎを願っていた。しかしながら、神に対する礼拝と神の御前に立つ守護聖者に対する崇敬とは、中世キリスト者の心の中にはっきりと区別されていたのであるから、外的宗教形態においては彼らの伝承や宗教行事がどれ程多神教的であろうとも、彼らの守護聖者崇敬は、やはり旧約の神の民の流れを受け継ぐ一神教の枠内で理解すべきものであろう。

彼らのこのような思想的立場に立つ時、多神教は決して排斥・撲滅すべきものではなく、キリストの福音を伝えるべき異教徒の信じている神々や寺院などは、むしろ一神教に奉仕させるように積極的に利用すべきものに思われて来る。かつて古代ローマ人が、征服した国々の多神教を排斥せずに寛大な心で保護し、紀元前27年にはローマでもそれらの神々の像を集めてパンテオンの神殿に祀ったように、4世紀にキリスト教が公認された後のローマ人キリスト者たちも、例えば399年に一旦ホノリウス帝によって

閉鎖されたパンテオンの建物を、西ローマ滅亡後の 609 年に聖母マリアとすべての殉教者の聖堂に改造して使用したり、他の多くの異教寺院もキリスト教の聖堂に改装したり改築したりして利用している。596 年にベネディクト会系の修道者アウグスティヌスら 40 人を英国のアングロ・サクソン人伝道に派遣した教皇グレゴリウス 1 世が、後で異教の祠などは壊さずにキリスト教のものとして利用するよう手紙で書き送ったのも、同じメンタリティーからであろう。この布教原則は、8 世紀のゲルマニア布教に多大の成果を挙げたボニファチウスにも、その他の多くの布教者にも受け継がれている。

同じ頃キリスト者となった庶民の側から生み出され発展させられた守護聖者の伝承も、かなりの部分は、既にある異教徒たちの伝承のキリスト教化と考えても良いのではなかろうか。このような観点に立って本書を読む時、例えば守護聖者クリストフォルス像が古代から中世にかけていろいろと大きく変遷する話(14-27 頁)を読んでも、龍退治をした騎士ゲオルグについての異教徒たちの伝承が、いつの間にかキリスト教的守護聖者ゲオルグについての伝承に変えられている話(32-34 頁)を読んでも、それにつまづくことなく、むしろ非キリスト教的伝承、異質なものを、次々とキリスト教的伝承、自分たち独自のものに変えて行く民衆の旺盛な産出力に驚くばかりである。守護聖者たちが、古代ゲルマン信仰の主神ヴォーダンの役割を肩代わりしたり、その祝日が農民暦で新しい役割を担わされたり、天気占いや農作の吉凶占いに利用されたりする話も、興味深い。

本書が扱っている守護聖者は、聖クリストフォルス、聖ゲオルク、聖マルチン、聖バルバラ、聖ニコラウス、守護天使ミカエル、聖ヴァレンタイン、ワインの守護聖者、聖家族の 10 件だけであるが、中世のキリスト者たちに尊崇された守護聖者は、もっとはるかに多い。本書は、その中の主要なものを幾つか取り上げて提示しただけである。例えば中世のキリスト者たちが危急の時にその名を呼んで助けを願い求めたいいわゆる「救難聖人」は、通常 14 人数え上げられ、ABC 順にその名を挙げると、アカチウス、

バルバラ、ブラジウス、クリストフォルス、クリアクス、ディオニジウス、エラスムス、エウスタキウス、ゲオルグ、カタリナ、マルガレタ、パンタレオン、ヴィトゥスの13殉教者と殉教者でないエジディウスで、これにもう一人、レオナルド、マグヌス、ニコラウス、オスワルド、クィリヌス、ロクス、ヴォルフガングなどの中から加わって15人となることもある。これらの救難聖人のうち本書に取り上げられているのは、ニコラウスを入れても4人だけである。他にもまだ多くの守護聖者がいたことを思うと、この方面の研究はまだ緒についたばかりという印象を深くする。

なお、本書が扱っている守護聖者や民間行事を通覧すると、著者は、主としてドイツやスイスなどドイツ語圏の民間に広まっていたものから取材し、それにフランス、英国、北欧のものなどを少し加えているように思われる。もしイタリアの民衆に特に尊崇された守護聖者を選んだなら、アグネス、アガタ、チェチリア、洗者ヨハネ、バドヴァのアントニオ、その他の聖人を取り残すことはしなかったであろうし、スペインで取材したなら、また別の聖人を加えたであろう。民間の習俗についても、イタリアやスペインでは、本書に描かれているものとは違うものが多い。このように考えると、本書を補う意味で、イタリアやスペインあたりで崇敬されていた守護聖者についての同様の研究も、これからの課題として要望されて来る。

著者は「あとがき」に、「本書を終えて、まだ書き足りないこと、欠落したことも多々あると思う」(205頁)と述懐しているが、地方によっても時代によっても、いろいろと多様に変遷する通俗的伝承や民間行事をこれ以上に細かく収集し記録してみても、そのこと自体にはそれほど意味がないのではなからうか。それよりもむしろ、守護聖者伝承を生み出し発展させた一般民衆の旺盛な創作活動と平行して、カトリック教会側が受け入れ発展させたそれらの守護聖者についての説教やミサ典礼などの変遷を研究するなら、両者の比較から当時の民衆の創作活動を、もっと立体的に明らかにすることができるのではなからうか。

本書にも数回引用されている『黄金伝説』は、ドミニコ会員でジェノヴァ

の大司教であったヤコブス・ア・ヴォラジネ（1228/30-1298）が収録したものであるが、16世紀には、ルイス・ヴィヴェス（1492-1540）やドミニコ会員メルキオール・カーノ（1509-60）らの学者たちによって厳しく批判された。それでは、イエズス会員ジャン・ポランドゥス（1596-1665）は、1630年以来多くの人の協力を得てすべてのカトリック聖人の伝記に関する膨大な資料を収集し、アントワープに創設した独自の資料館に収蔵した後、多くの学者からなる研究グループを組織して可能な限り批判的な聖人伝研究を始めた。ポランディストと呼ばれたこの研究グループは、1643年から1940年まで3世紀かけて完成した68巻の聖人伝シリーズを公刊している。もし中世キリスト教が生み出し発展させた守護聖者伝承についての植田氏の研究に何かが不足しているというなら、それは何よりも批判的聖人伝との比較検討と言って良いであろう。

誤解を避けるために断っておくが、筆者は、学問的批判的に執筆された伝記だけが唯一価値ある伝記で、それと矛盾する伝承はすべて価値のないものと考えているのではない。ただ民間伝承が、いつどのような形態で現実離れしたかを明らかにすることになり、その時代の民衆の関心や心の動向などに探りを入れるよすがにした方がよい、と考えるだけなのである。夢は、この可視的三次元世界の現実ではない。しかし、私たちの心にとっては一つの貴重な現実であって、無下に軽視してはならない。心にストレスが蓄積する時には、夢にもそれが反映するであろう。にもかかわらず、心のその声を抑圧したり一笑に付したりして取り合おうとしないならば、その人はやがて調和のとれたゆとりある生き方ができなくなったり、体のどこかに支障を来したりするであろう。その意味では、夢も一つの現実と言って良い。史実でない守護聖者伝承も、それを保持し生活に生かしている民衆にとっては、一つの夢のような現実になっており、彼らの心も信仰も、実際にそこから豊かな活力を受けているのではなからうか。

著者は本書に「歴史に仮定は許されないにしても、もしキリスト教やその文化を受け入れなかったら、ヨーロッパはもっと軽くて浅い文明を形成

していったかもしれない。反対に、キリスト教を受け入れることによって、ヨーロッパの思想や芸術は、存在の重さを感じさせる深い彫りのあるものになっていったのである」(29頁)と書いているが、もしここで言われている「キリスト教を受け入れることによって」を、キリスト教を土着化させることによってという意味で理解することが許されるならば、全く同感である。

16世紀の我が国にキリスト教を伝えた宣教師たちは、異教の背後に悪魔の働きを見ようとする、当時のイベリア半島に強かったゆがんだ神学に禍いされながらも、信仰を庶民の心に根づかせるため、絵画・合唱・器楽・劇・行列などを利用し、戦国期の庶民に新しい夢を与えながら、結構巧みに伝道していたようである。その手段の一つで、1560年代に降誕祭や復活祭に演じられ、異教徒を含む多くの日本人から愛好されたミステリオ劇(聖書劇または聖史劇とも訳される)が、1570年に新任の布教長ガブラル神父によって上演禁止にされたのは、キリスト教土着化の観点から見て残念ではない。おそらくプロテスタント側から「世俗化」として非難されたルネサンス教会美術・音楽に対して幾分批判的になったトリエント公会議(1545-63)が、教会音楽は単純敬虔であるべきだ、という方針を取ったことに基づく上演禁止であったと思われる。しかし、もしこのようにして数百年来ヨーロッパの土壌に深く根ざした土俗的キリスト教の中から、ただ整合化された教義だけ、あるいは浄化され法制化された福音、庶民の心を魅惑する民族精神の臭いも感動も失った理想や義務だけを強調する教会組織を我が国に広めようと試みるなら、理知的な人々を一本釣りのようにして改宗させることはできても、いつまでも庶民全体を獲得することはできないであろう。幸いキリシタン時代の宣教師たちは、1580年代に入ってカブラル神父の布教方針を変更したが、前世紀後半以降のキリスト教日本伝道を回顧する時、この点についてまだ工夫すべき余地が多く残されているように思われてならない。

日本だけの問題ではない。欧米のキリスト教も、近年ますます素朴な民

衆の伝承や古い習俗から遊離し、聖者伝承や聖遺物に対する関心も示さなくなつて、民衆に対する魅力も影響力も、大きく失いつつあるように思われてならない。本書は、中世キリスト教における守護聖者伝承とそれと結びれた習俗を描きながら、同時に現代キリスト教の底辺面におけるこのような根本的欠陥と弱体化についても反省させてくれる、類少ない著作であると言つて良い。